
反面ライダーディケイド -a variety world- 第二章 「十・年・共・演」

そらとび

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド - a variety world -
第二章 「十・年・共・演」

【Nコード】

N2734Y

【作者名】

そらとび

【あらすじ】

通りすがりの仮面ライダー、ディケイドこと門矢士。今回訪れるのは「仮面ライダーフォーゼ」の世界。すべてが型破りな宇宙ライダーと出会い、その瞳は何を見る？

第一話「十・年・共・演」(1) (前書き)

どうも、そらとびです。皆さんお久しぶりです。

仮面ライダーディケイド小説、やっとこさ再開です。久々すぎて誤字の修正とか大変でした(^ - ^) ;

今回は「フォーゼ」編です。フォーゼのない日曜日が寂しくて書き始めてしまいました(笑)

ディケイドとフォーゼ、記念ライダー同士の共演です。拙い文章ですが、ぜひお楽しみくださいませ。

最後にひとつ。前回のフレプリ編では一回一回前書きや後書きを書かせてもらってましたが、今回から前書きはこの一回のみ、後書きも最終話の最後の1回のみにしたいと思います。余った前書きのスペースで「前回までのあらすじ」を、後書きのスペースで「次回予告」を書きたいと思います。ディケイド本編に少しでも近づきたいと思いますのでw

読み終わった後、感想など頂けるととても嬉しいです。

それではごゆっくりどうぞ！

第一話「十・年・共・演」(1)

「ふう……………」

深呼吸。

そして、階段をゆっくりと上り始める。それほど長い階段ではない。だが、出来ることなら永遠に続いて欲しいとさえ思う。

これから行く所は、正直言ってあまり気乗りしない。いやむしろ、行かなくていいなら行きたくない。

だが、行かなければ何も始まらないのだ。だから、行くしかない。階段を上りきり廊下をしばらく歩くと、目指していた場所へとたどり着いた。

扉を開け部屋の中に入ると、一斉に注目を浴びる。それまで喋っていた奴らが一気に静まり返り、雰囲気agaraりと一変した。

最初はこんなもの…なのだろうが、そうわかっていても少し緊張する。

多くの視線を感じているまま、俺はその視線達と対面した。教卓に出席簿を置き、自己紹介をすることにする。

だいたいわかっただろうか。

そう。俺・門矢士は、

「…今日から、このクラスの臨時講師をすることになった、門矢士……です(ニッコリ)」

高校教師になっていた。

写真館でのこと。

「これは…ロケットですか？」

光夏海・夏みかんが言った通り、スクリーンには宇宙空間をバックに月面基地が描かれており、右下にはロケットのようなマークも描かれている。

描かれているのだが…そのロケットには、大きな複眼、真っ直ぐ伸びた触覚があった。

まるで そうか、もしかして、この世界のライダーと何か関係があるのかもしれない。

「それよりも、この月面基地…お宝の匂いがするね」

「お前…ホントお宝好きだな」

「褒めても何も出ないよ、土？」

海東・海東大樹が嬉しそうに笑った。別に褒めてねえよ。

「とにかく、宇宙に関係ありそうな所に行ってみればいいってことじゃないかな？ 今回の土の服装からすると…なんかすごい大きな会社とか？」

「そうだな」

ユウスケ・小野寺ユウスケの言った通り、俺は黒い新品のスーツを着ていて、左手には鞆を提げていた。自分で言うのもアレだが、まるで新人社員である。

「それにしてもユウスケ、よくわかってるじゃねーか。海東とはえらい違いだ」

「ん？ また褒めてくれたのかい、士？」
「だから違うって」

海東にはユウスケを是非とも見習ってほしいところだ。

「鞆の中には何が入っているんだい？」

「…そういえば、まだ開けてなかったな」

…海東に言われるまで気付かなかった。

「ふふん」

「どや顔をやめろ」

そう言いつつ鞆を開けると、一つの大きな封筒が目をつけた。
ユウスケが封筒から一枚の書類を取り出す。

「差出人は…」天ノ川学園高等学校…？」

…なんだって？

「なになに…」この度は臨時講師の件、承ってくださいさり誠にありがとうございます。教職員一同、門矢先生を心よりお待ちしております。す」だって」

「こ、高校の先生……」

なんてこった…。

俺は人に物事を教えるのが得意じゃない。今まで何でもそつなくこなしてきたが、これだけはどうも苦手だった。

「頑張ってくださいね、門矢先生っ」

「先生って呼ぶな」

なんだろう、すごく気が重い。

重い、とにかくやってみるしかないさそうだな……。

そんなわけで俺は今、教壇に立っているのである。

指定されていた時間より早く出勤した俺は、大杉とかいう面白い格好の先生に、

「あのですね門矢先生。先輩として僕から言っておくこととしてはですね、教師の第一印象は”笑顔”が一番大事なんですよはい。これはね間違いない。いやマジで」

としつこく言われ（本当にしつこかった）、教師とはどういうものなのか知らない俺はひとまず、その忠告を聞いておくことにした。

俺は作り笑いが苦手なのだが、どうやらクラスの面々には悪い印象には映らなかつたらしい。

とりあえず、ホツとした。

「えー、それじゃまず出席を取っていきますが……ん？ 歌星と如月はどうした？」

「はいっ先生、賢吾ちゃんと弦ちゃんは保健室ですっ」

「そうか。ありがとう」

答えてくれたのは城島ユウキという女子生徒だ。

歌星賢吾と如月弦太郎 この2人のことについても大杉が話していた。

「門矢先生門矢先生、2Bの生徒のなかでも、特に歌星賢吾と如月

弦太郎には気をつけといた方がいいですよ。あいつらよく保健室だの何だのって言って授業をサボるんですよ！ 全く何考えてんだあいつらは！」

「さあ……俺ちよつと授業の準備しなきゃ」

話が長くなりそうだったので適当にごまかしたが……ちよつと気になるな。

「…よし、臨時講師なので短い間ですが、これからよろしくお願いします！（ニッコリ）」

「イエーイ！」

「門矢先生よろしくー！」

クラスの皆がわつと盛り上がる。どうやら、俺の事を受け入れてくれたようだ。

最初はどうかと思っていたが……案外うまくやっていけそうだ。早く皆の顔と名前を覚えなきゃな。

お昼時の食堂ほど忙しいものはない。

「日替わり定食、2つ入りましたー」

「カレーライスの方、おまちとおさまでした。熱いので気をつけてくださいね」

お腹を空かせた生徒たちが、次々にテーブルを埋めていく。それを横目に、フライパンの火の加減を調整していく。

申し遅れたが、私の名前は鳴滝。世界の破壊者ディケイド・門矢土がこの世界に来たのを追い、この学園に居ることを突き止め、食堂のお兄さ……おじさんとして潜入しているのだ。

…ん？ 私に料理が出来るのかって？ 私にだって人並みの料理くらい作れるさ。

さて、私がここに潜入しているのは、ディケイドにこの学園の秘密を知られる前に追い出すための作戦を実行する場所として、最も相応しい場所だと判断したからだ。

ここは教師も利用することの出来る食堂で、ほとんどの教師がここで昼食をとっている。この学園に来たばかりのディケイドは当然、他の教師の真似をしてここへ来るはずである。

そして奴の頼んだ食事に毒薬を入れ、それを食べて気を失ったところで時間を止め、どこか別の世界に放り出すのだ。

いつもより少し回りくどいかもしれないが、今回はディケイドに先を越されてしまったのでこのような作戦になってしまったのだ。この学園には生徒や教師、大勢の人々がいる。正体をばらさないためにはこの方法が一番準備しやすく確実である。

もういつでも作戦を決行する準備は整っている。あとはディケイド、お前が来るのを待つだけ……。

俺・門矢士は午前中の授業を終えると、夏みかんの作ってくれた弁当を片手に保健室に向かっていた。一応、歌星と如月に顔を見せに行かないとな。

しばらくすると、保健室に着いた。

「失礼します（ニッコリ）」

「門矢先生。どうかされましたか？」

「あの、うちのクラスの…2年B組の歌星と如月がここにいて聞いてたもので」

「歌星くんと如月くん？ 今日2人とともにここには来てませんけど」

「なんだと……！？」

「門矢先生？ いきなりどうしたんですか？」

「…いや、あの、ありがとうございます。失礼します！」

驚きのあまり、一瞬素に戻ってしまった…。

「2人ともいないって、どういうことだ！」

「食べに来ないって、どういうことだ！」

「タキさん？ いきなりどうしたよ？」

「…いや、あの、なんでもないです」

驚きのあまり、一瞬素に戻ってしまった…。

私・鳴滝は嵐のようにやって来る注文を捌きながらデイケイドが来るのを待っていたのだが…、休憩が終わり、ついに奴が現れることはなかったのである。

しかも、奴のことばかり気にかけていたせいで食器を割ってしまい、その後始末を黙々とやっている最中である。

(デイケイドオオオオオオ！ 貴様が食堂に来なかったせいで、私の体はボロボロだ！)

そう叫んでしまったかったが、怪しまれるといけないのでやめた。私は仕事を終え、学園の渡り廊下で一人ため息をついた。

「…私は一体何をしてるんだ」

ふと、口からそんな言葉が漏れた。

せつかく作戦を考えたのに失敗してしまった。しかもそのあと食器

まで割ってしまった。

「何だか私、ここ最近失敗してばかりだなあ」

こうしている間にもデイケイドは、またさらなる世界の破壊を招いているかもしれないというのに…。

何だか自分が情けなかった。

そう考えていたときであった。

「そんなにデイケイドが怖いか…？」

突然そんな声が聞こえたかと思うと、目の前に一体の怪人が姿を現した。身体にさそり座を宿している。

こいつ、まさか…。

「こ、怖くなどない！ 怖くなど」

「無理しなくてもいい。貴方に力をあげよう。怖いものを追い払うことの出来る力を…」

そうしてその怪人が去った後、気づけば私の右手には、ひとつの黒いスイッチが握られていた。

「星に、願いを……」

「…俺は一体何をしてるんだ」

ふと、口からそんな言葉が漏れた。

午後1時。

幸いにも今日は午後から担当する授業が無かったので、俺 - 門矢士

は学園中の教室や施設を片っ端から捜してみたのだが、まだ2人は見つかっていなかった。

まだ弁当も食べていない。2人のことは心配だが、時間の経過と空腹からの苛立ちで段々薄れていく。

成り行きでこの学園に来たが、よくよく考えてみれば、この学園と写真館で見たスクリーンの絵と、何の関係もないじゃないか。

見た限り、この学園は特に何の変哲もない普通の高校である。これと宇宙と、なんの関係があるというのだろうか。

わからない。

全くわからない。

何だかもう、面倒くさくなってきた。

俺はもう、疲れた。

そう思ったときだった。

”立入禁止”とテープが張られている、誰も使っていない小さな部屋。

その中にふと見かけた掃除用具入れに、俺は何かの違和感を感じた。その違和感は何なのかはよくわからない。わからないが、確実に、何か普通じゃない気配のようなものを感じた。

…とりあえず開けてみるか。

そう思い用具入れの扉を引いた瞬間、突然俺は強烈な光に包まれた。

「眩しい……………っ！」

しばらくしてようやく目が慣れ、俺は光の先を見据えた。どうやらこの光は、どこかへと繋がっている道のようである。

俺は意を決して光の中に足を踏み出した。

何ともない。

俺はその光の先へと進んでいった。

すると、目の前にまた一枚の扉が姿を現した。これはさっきのよう

に押したり引いたりして開けるものではなく、横開きの自動ドアのようだった。

俺がその扉に近づくと、扉がゆっくりと開いた。

「これは……………」

そこには学園の教室よりも広く開放的なスペースが広がっていた。白を基調としたカラーリングのその部屋の中央にあるテーブルには”友情”と綺麗にレタリングされている文字が書いてある黒いかばんとこの学園指定のかばんが置かれており、そのまわりには、スイツチのようなものが数個散らばっていた。そして、

「君は一体……………」

「…誰だ？」

こちらを見て呆然としている2人の男子生徒こそ、俺がさっきから捜していた歌星賢吾と如月弦太郎に違いなかった。

第一話「十・年・共・演」(1) (後書き)

次回、仮面ライダーディケイド

「俺がこの部の顧問になってやる」

弦太朗達の部活「仮面ライダー部」の顧問になると宣言し、フォーゼと共に戦うことを決意する士。

「この力なら、ディケイドを倒せるかもしれない…！」

一方、さそり座のゾディアーツから渡されたスイッチの誘惑に負けてしまい、どんどん暴走していく鳴滝。

そして士は弦太朗達の目の前で変身、ついに正体を明かす！

次回、お楽しみに。

第二話「十・年・共・演」(2) (前書き)

これまでの仮面ライダーディケイドは

「…今日から、このクラスの臨時講師をすることになった、門矢士
…です(ニッコリ)」

仮面ライダーディケイドこと門矢士かどや つかさは、新しく来た世界でいきなり
高校の教師をする羽目になった。

授業をサボっているという噂のある2人の生徒 - 歌星賢吾うたほし けんごと如月弦
太朗にたろうを探し回り、学園内の掃除用具入れから繋がっていた部屋で偶
然発見する。

そのころ鳴滝なるたきは、さそり座の怪人から黒いスイッチを渡されていた
。

第二話「十・年・共・演」(2)

「君は一体…」

「…誰だ？」

しばらくの間、互いに何を話せばいいのかわからず、部屋は沈黙に包まれた。

はっと我に返り、先に沈黙を破つたのは俺 - 門矢士だった。

「俺は…この学園に新しく来た先生だ」

「先生…。…さっきは”君”と呼んでしまって、すいませんでした」

「お前、名前は？」

「歌星賢吾です」

この礼儀正しい方が歌星賢吾か。となるとこの短ランでリーゼントのいかにも不良みたいなのが…

「俺は如月弦太郎。この学園の全員と友達になる男だ！」

「またそれか。君ってやつは…」

如月弦太郎、だな。

「で、お前ら、ここで何してたんだ」

俺は歌星に聞いた。

「それは…」

歌星は急に言葉に詰まった。

「ていうか、ここどこだよ。なんで外真っ暗なんだよ」

「……」

「言えないのか？」

「あの…これはですね、」

「仮面ライダー部だ！」

はい？

「如月！ 余計なことを」

歌星の制止を聞かず、如月は続けた。

「この学園にはびこる怪物から生徒を守るための部活、それが仮面ライダー部だ！ そしてここは俺達の部室、月面基地ラビットハッチだ！」

月面基地…？ 仮面ライダー部…？

マジでか……？

「これが我が仮面ライダー部の旗だ！ ちなみにデザインしたのは俺だ！」

そう言つて如月は壁に掛けてある旗を指差した。

『つかむぜ、宇宙！』と書かれている旗の中央にはロケットが描かれていた。大きな複眼と真っ直ぐ伸びた触覚が印象的である。

……あれ？

俺、これどこかで見たことあるような…。

「如月い……君ってやつは、なんで全部話してしまったんだー！ー！ー！」

「うわーっ！ スマン賢吾、ついっつかり……！」

「君は口が軽すぎるんだ、信じられないくらいになああああああ！ー！」

「俺が悪かったあああああ！」

歌星がキレた。どうやら、歌星が黙っていたことを如月がばらしてしまっただけらしい。

にしても、学園を怪物から守るための部活とか、ここは月面基地だとか……にわかに信じがたい。

いや、それ以前に、

「仮面ライダー部、って……」

「おう！ ちょっと見てる！」

そういつて如月が取り出したのは、…なんだこれ。

スイッチの付いたソケットが4つあって、それぞれにさらにスイッチが差し込まれている。向かって左側には、引き倒し式のレバーがある。

如月の腰の所でそれは自動的に装着された。どうやらベルトのようだが…なぜあんなにゴツイデザインなんだ？

「如月、やめろ！ 先生の前で……！」

「ここがばれちゃったんだ、別にいいだろ！」

「ばらしたのは君だろ！」

歌星の制止を振り切り、如月はソケットの前のスイッチを向かって左側から順に倒し、体の前で左腕を曲げて構え

3 (スリー！)

2 (ツー！)

1 (ワン！)

「変身！」

右手を掛けていたレバーを引くと同時にその手を天へ高く上げた瞬間、強烈な蒸気と熱風が駆け抜けるように広がった。

あまりに突然だったので俺はみつともなく尻餅を搦いてしまった。

「痛つてえ……… ったく、いきなり何なん」

何なんだ！

そう言おうとした俺は立ち上がった瞬間驚愕した。

目線の先にいたのは、俺の知っている如月弦太郎ではなかった。

「宇宙、キタ

、(。°。) /

「！！」

さつき見た旗に描かれているのと同じ、大きな複眼に真っ直ぐ伸びた触覚 - 正確にはアンテナか - のロケット頭。宇宙服のような真っ白いスーツ。所々に「x」「」の幾何学模様のような意匠も見られる。

宇宙飛行士がそこにいた。

「先生、どうだ！　これがこの仮面ライダー部の切り札」

宇宙飛行士…

ライダー…

……………思い出した！

こいつの名前は

「仮面ライダーフォーゼ！」

「…え？」

「あれ？」

「何っ…？」

……………ハモった？

手元に残された、一つのスイッチ。

私・鳴滝は何も言わずそれをただじっと見つめていた。

さつきさそり座の怪人から渡された、赤いボタンのスイッチ。

これが、これこそが、ディケイドに知られなくなかった秘密の代物なのだ。

このスイッチを押してしまえば、どんな人間もたちどころに怪人に変身してしまう。

スイッチチャーと呼ばれるその人間は力を頼るようになり、やがて意識を抜かれてしまい、人間に戻る事が出来なくなるのだ。

ディケイドがもしこのことを知ったら、そのスイッチの秘密を知ろうとする。そうして奴に干渉されてしまうと、やがてこの世界も破

滅の道を辿ることになってしまっただろう。

この世界には、この世界の仮面ライダーがいるのだ。
ディケイドは関わらなくてもいい。

しかし…。

どうもさつきからそわそわする。

何故かって？

それは…

スイッチを押してみたくなってしまったのだ。

人間、スイッチを見ると押してみたくなるらしく、特に赤いボタンには反応しやすいのだとテレビで見たことがある。

このスイッチは危険だ。押すとどうなるかわからない。
だが 押したい。押してみたい。

この際結果がどうなるかではなく、ただ純粹に押してみたい。
押したい。押したい押したい押したい押したい押したい押したい！
ええい、ままよ！

一思いに押してしまえ、鳴滝

そう思ったところで、私の理性が警鐘を鳴らした。

押しではいけない。押したら取り返しが付かなくなってしまう。
危ないところだった。

危うく悪魔の力を使ってしまつところだった。
こんなスイッチ、さっさとどこかへ捨ててしま……はっ、はっ、は
っ、

「はーつくしよい！」

カチッ。

小気味良い音が響いた。

「あっ
」

そうして私は怪物になった。

「ここは…仮面ライダーフォーゼの世界…」

やっと俺・門矢士はこの世界のことを思い出した。

「先生、どうしてフォーゼのことを…」

「もう聞かなくてもだいたいわかる。思い出したからな。それより」

「それより、何ですか？」

歌星が聞いた。俺は、高らかに宣言した。

「今日から、俺がこの仮面ライダー部の顧問になる」

「ええっ！マジかよ!？」

「いきなりどうしてですか!？」

「どうしても、だ。俺はこの部に、そして」

俺は如月弦太朗・仮面ライダーフォーゼを指差して、

「お前にフォーゼに興味がある」

「俺に…興味か」

「ああ」

如月が困惑したような仕種を見せる。まあいきなりだから当然か。

「先生：先生は一体、」

歌星が何か言いかけた瞬間、ハンバーガー型のメカが突然割り込んできた。

「バガミール…！？ ゾディアーツか！」

バガミールと呼ばれたメカを操作しながら歌星がそう言った。ゾディアーツ…怪物のことだな。

「行くぞ如月！」

「ああ、言われなくても！」

歌星と如月・フォーゼが部屋を飛び出す。

「先生はここにいてください！」

歌星がそう付け加えた。が、

「俺も行く！」

俺は聞かなかった。

校門付近。

一体の怪物・ゾディアーツが入口の壁を壊しており、辺りは騒然としていた。

「行くぞ、賢吾！」

「ああ。弱点を分析するまで時間を稼いでくれ！」

フォーゼは怪物へと突っ込んだ。怪物はまだこちらに気づいていない。

「あらよっ！」

フォーゼが強烈な蹴りを怪物の腹にお見舞いした。怪物が悲鳴を上げ、ようやくこちらを振り向く。

怪物は、爬虫類特有の鱗で覆われた皮膚を纏い、顔は醜く、長い尻尾を持っていた。また、体にとかげ座を宿している。

「とかげ座の怪物…リザード・ゾディアーツと言ったところか」

「先生…どうしてゾディアーツのことまで」

「言ったる。思い出したって」

「だからなぜ…」

歌星が首を傾げた。

「くそっ、こいつ、ヌメヌメしてて攻撃が当たらねえ！」

先制はしたものの、フォーゼは苦戦を強いられていた。怪物の皮膚から粘着質の液体が出ており、攻撃を受け付けないのだ。何度も何度もパンチやキックを繰り返すが、そのうちの数発しか相手に与えることが出来なかった。

「くっそ…、このっ、このっ、！」

やけになったフォーゼがやみくもに拳を繰り返す。拳は宙を切った。

「グオオーッ！」

その隙を突かれた。怪物の尻尾がフォーゼを襲った。尻尾ががつちりとフォーゼを捕らえ、巻き付き、締め上げる。

「くそつ、放せ！ このっ！ このっ！」

両手が使えず、尻尾を引きちぎろうとするも、怪物の力は想像以上に強かった。

「如月、スイッチだ！ スwitchを使え！」

「ダメだ、スイッチまで手が届かねえ！」

「くそつ、こうなったら…！」

歌星が持っていた鞆を開け、なにやら操作をした。するとまもなく、

『パワー ダイザー！』

黄色い巨大なロボットが、どこからともなくやって来た。その高さは建物の二階くらいだろうか。車の状態から変形し、戦闘体制に入っている。

「俺がパワーダイザーで援護する！ 開放されたら俺が食い止める間にスイッチを使え！」

そう言つて歌星はそのロボットに乗り込んだ。ロボット・パワーダイザーが起動し、歌星が操縦桿を引く。パワーダイザーは怪物に向かって右手を振り上げ、勢いよく怪物につかみ掛かった。

ばいっ。

鈍い音がした。
吹っ飛んだのは

「ぐああああっ！」

歌星の操縦するパワーダイザーの方だった。
信じられない。どうしたんだ、歌星。怪物と、その身長の二倍以上あるロボット、パワーダイザー。後者の方が圧倒的に有利に見えるのだが。
となると、問題は 歌星だった。

「くっ…はあ、はあっ…くそっ」

「賢吾、無理するな！ 身体に響くぞ！」

どうやら歌星は体調があまり良くないらしい。

「大丈夫…だ、このくらい…ぐああっ…！」

怪物がフォーゼを締めたままの尻尾で、パワーダイザーに鞭打ちを喰らわせた。

「ぐああああっ！」

「がああっ…！」

フォーゼと歌星、双方が苦痛に顔を歪めた。歌星の方は、明らかに限界が近づいている。ダイザーが、動かなくなつた。

「こ…このままじゃ…俺も賢吾もやられちまつ…！」

フォーゼ・如月が悔しげに叫ぶ。その声もだいぶ消耗している。

こうなったら……。

「俺がやるしかねえか……！」

俺はバックルを取り出し、腰に装着した。変身ベルト、ディケイドライバーである。

「先生………？」

歌星が掠れた声で呟いた。俺はそれを聞きながら、腰のライドブッカーから『DECADE』のカードを取り出した。

「安心しろ歌星。俺がなんとかしてやる。俺は仮面ライダー部の顧問で、通りすがりの仮面ライダーだ！」

「仮面……ライダー？」

「変身！」

『KAMEN RIDER! DECADE!』

そう、俺は

「仮面ライダー、ディケイド！」

第二話「十・年・共・演」(2) (後書き)

次回、仮面ライダーディケイド

「あのスイッチは何かが違う」

鳴滝の使っているスイッチは、普段ゾディアーツが使うスイッチの改良版、ヘルスイッチだった。

士達仮面ライダー部が対策を講じていると、第二のヘルスイッチ被害者が現れた！

「ディケイド、私が力を貸そう」

そして鳴滝が、士達とついに共闘 ！？

次回、お楽しみに。

第三話「十・年・共・演」(3)(前書き)

これまでの仮面ライダーディケイドは

「宇宙、キタ

、(。°) /

!!

仮面ライダーディケイド・門矢士が出会った如月弦太朗は、アストロスイッチで戦う仮面ライダー、フォーゼであった。

同じ頃、鳴滝はすっかりスイッチを押ししまい、とかげ座のゾディアーツへと変身してしまう。

苦戦するフォーゼを助けるために、士はディケイドへと変身した
!

第三話「十・年・共・演」(3)

「仮面ライダー、ディケイド！」

「ディケイド…ダト!？」

仮面ライダーディケイド・俺、門矢士の登場に、怪物・リザード・ゾディアーツは初めて言葉を発した。

「ディケイド…キサマヲ、タオス！」

怪物はさつきと同じように、仮面ライダーフォーゼ・如月弦太郎を締め上げたままの尻尾を振り回した。

「うおっ！ あぶねえ！」

「うわあああつ、目が回るー！」

「助けてやるからもう少し我慢しろ！」

右に左に尻尾をよけながら、ディケイドライダーにカードを装填しバツクルを回す。

『ATTACK RIDE! SLASH!』

「タオス！ タオス！ タオス！」

怪物が吠え、尻尾が迫る。3秒、2秒、1秒…、

「今だ！」

尻尾が伸びきる。今まさに俺を捕らえんとする一瞬のタイミングで、俺はライドブッカーを振り下ろした。

「ゲガアアアアアア！」

怪物が悲鳴を上げる。尻尾は怪物から切り離され、フォーゼは酔うやく…もといようやく開放された。

「うつぶ…助かったぜ、先生」

「大丈夫か？ …来るぞ」

「えっ？ …うわぁっ！」

怪物が口から黄色い液体…どう見ても××だが、ここで言うところなので敢えて伏せておく…を俺達にむけて吐きだした。どうやら怪物も自分の攻撃で酔ってしまったらしい。

「くそっ！」

俺はフォーゼを引っ張って、液体をギリギリかわした。液体は後ろの壁に命中。

次の瞬間、その壁が勢いよく爆発した。一瞬にして周りに炎が広がり、爆風が突き抜ける。

「どうなってんだ、あいつの××は…」

「ただの××じゃないってことか…これじゃ、近づくことは難しいな」

フォーゼが言った。確かにあれをまともに受けたら心身共にひとたまりもない。

となると、戦術はひとつ。

「…よし、遠くから攻撃だ！」

俺とフォーゼは怪物の左右に分かれた。

「グガッ！ グガガッ…グゲエエエエエエエ！」

怪物は半狂乱しながら、液体を乱れ打った。俺とフォーゼは寸でのところでそれをかわす。俺は液体に注意しながら、

『ATTACK RIDE！ BLAST！』

ライドブッカードをガンモードに切り替え、フォーゼの準備ができるのを待つ。

一方のフォーゼも怪物との距離を置きながら、

『ランチャー オン！』

『リーダー オン！』

右足に箱型のランチャーモジュール、左手にリーダーモジュールを装着。リーダーモジュールで怪物に狙いを定めた。

「先生、いつでもいいぜ！」

「よし！ いくぞ！」

『FINAL ATTACK RIDE！ DE DE DE DE
ECADE！』

『ランチャー レーダー リミットブレイク！』

「デイモンシヨンブラスト！」
「ライダー…宇宙ミサイル！」

俺は引き金を引き、フォーゼは右足を強く踏んだ。
カード型のエネルギーを通過し強化された連弾と四方からのミサイルの雨が、一斉に怪物を襲った。

「グワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

断末魔が響き渡る。攻撃に耐えられず、怪物は何度も爆発を起こし倒れた。

「やったか!？」

黒煙が揺らぐ。視界が晴れ、そこに倒れていたのは

「……鳴滝!」

信じられないことに、怪物の正体は鳴滝だったのだ。

「先生、このオッサンの事知ってるのか？」

「知っているも何も…ある意味長い付き合いだ」

なぜ？

なぜ鳴滝がこのようなことを？

俺は混乱していた。

鳴滝は気を失ったまま動かない。その手には、黒いスイッチが握られていた。

「…如月! あのスイッチを拾え!」

ここまでずっと黙っていた歌星賢吾が言った。

「おう、まかせろ！」

フォーゼがスイッチを拾おうとしたその時

「そうはさせん」

突然、別の怪物が現れた。身体にさそり座を宿した、幹部級のゾディアーツだ。

「うげっ、さそり座！」

フォーゼが一瞬たじろぐ。

「こいつは返してもらおう」

「あっ！」

さそり座の怪物は鳴滝の持っていたスイッチを奪い、それからすぐに姿を消した。

気を失った鳴滝を仮面ライダー部の部室・ラビットハッチに運び込むとちょうど終業のチャイムが鳴った。もうそんな時間だったのか。そうしてしばらくすると、部室に数人の生徒が現れた。そのうちの一人は、俺のクラスにいた女子生徒、城島ユウキだった。

「門矢先生……！ ど、どうしてここにいるんですか！？」

「それはこっちの台詞だ。お前も仮面ライダー部なのか？」

「はい！ この部の部員第一号です！」

そう言つて無垢な笑顔を見せる城島。

まあ、授業を抜けていた二人を庇っていたくらいだから、彼女もここに来るだろうとは思っていたけどな。

「あなたが臨時講師の門矢先生ですか。はじめまして、私がこの仮面ライダー部の部長、風城美羽です」

そう挨拶してきたのはこの学園のクイーンと名高い女子生徒、風城美羽だ。

この学園にはアメリカのハイスクールよろしくヒエラルキーが存在し、女子生徒と男子生徒のトップに君臨する生徒を、それぞれクイーン・キングと呼ぶ…と、大杉から聞いた。

「てか部長つて…俺は歌星が部長だと思つていたんだが」

「先生、俺は仮面ライダー部は認めてないしそんな部もありません」

「そんなことねえ！ ここは俺の創つた仮面ライダー部だ！」

「君が勝手にそう言つてるだけだ！」

「はたしてそうかな？ 僕らもこの仮面ライダー部、参加させてもらつてるんだけど？（キラーン）」

「そうっすよ、水くさいこと言わないでください賢吾先輩！」

続けてクイーンと並び立つキングの大文字隼に、情報屋のJKジェイク。女子高生の略ではない。断じて。

「仮面ライダー部はある！ 部長の私が言つんだから間違いないわ！」

「そうそう！ いい加減賢吾くんも認めてくれたらいいのに！」

「君たちは本当にもつ…！」

歌星が頭を抱えた。どうやら、歌星だけが部の存在を認めていないらしい。

「…まあいい、門矢先生のことを説明しておかないとな」

それから歌星によって、今に至る説明がなされた。新しいスイッチのテスト中に俺がここへ来たこと、ゾディアーツのこと、今寝かせている鳴滝のこと、そして、

「門矢先生は…仮面ライダーなんだ」

俺が仮面ライダーだということ。

「仮面ライダー…？ 都市伝説じゃなかったの？」

「俺もさっきまでそう思っていたさ、ユウキ。でも、先生は確かに仮面ライダーだった。ですよ、先生？」

「ああ。実は俺にはもう一つ通り名があるんだが…」

「どんなのですか？」

「”世界の破壊者”だとさ」

「ええっ？」

騒然とする部員達に俺は言った。

「まあ、あそこで寝てる鳴滝が勝手に言い触らしてまわってるだけだから、気にしなくていい」

「そ、そうなんですか…」

騒ぎはすぐに収まった。

「さて、門矢先生の紹介が終わったところで本題に入ろう」

全員一斉に歌星の方を向く。

「そこに寝ている鳴滝という男の使っていたスイッチ…あのスイッチは何かが違うんだ」

「何かあって？」

「それは私が説明しよう…」

「うわっ、鳴滝い！ 急に驚かすな！」

「失礼な」

鳴滝が意識を取り戻し、ソファーから起き上がった。突然すぎてびっくりした…。

「説明していただけるんですか…」

「ああ、私もゾディアーツのことは心得ているつもりだ」

「お願いします。実際にスイッチを使われた貴方が説明した方が、皆にも分かりやすいかもしれません」

おいおいマジかよ…。

「普通、ゾディアーツのスイッチはスイッチャー、つまりスイッチの使用者が自らスイッチをオン・オフにすることができ。しかし私が渡されたスイッチは違う。あれは一度押してしまえば、使用者は意志に関係なく暴走してしまうのだ」

「スイッチ自体に意志がある、ということですか？」

「言い換えるとそうなる。まだ試作段階のそのスイッチを彼等は”ヘル・スイッチ”と呼んだ」

「ヘル・スイッチ…」

「私は、その悪魔の発明を使う気はなかった。しかし、ひよんなこ

とからついすっかり押ししてしまった……」

「ひよんなことって……何ですか？」

「ちよっとくしゃみが、出そうになっただけ」

がくっ……………。

「……し、仕方ないだろ！ わざとじゃないんだ！」

「確かにそうですけど……」

「オッサン……そんなことで……」

「すまん。本当にすまないと思っている。まさか押ししてしまうとは思わなかったんだ」

歌星と如月、半ば呆れ顔である。確かに一番被害を被ったのは二人だ。

「……話を交えましょう。鳴滝さん、どうして俺達も知らない情報を知ってるんすか？」

話題を振ったのはジエイク。

「私は仮面ライダーの世界を監視する役目を持っている。それぞれの世界が破滅を呼び合わないように、陰でいろいろと働いているんだ」

「知らなかった……」

「よく聞け、ディケイド。お前が仮面ライダー世界の中核に干渉してしまうと、世界の調和は著しく失われてしまうのだ。だから私は貴様を重要監視対象として、先回りして行動を監視していた」

「初耳だな」

「私も初めて言ったからな」

「で、それとこれとどういいう関係があるんだ？」

「…そつくりなんだよ」

「何が？」

「デイケイドが世界へ及ぼす影響力と、ヘル・スイッチがこの世界へ及ぼす影響力がだ」

「ほう…？」

「ヘル・スイッチは今までのスイッチとはわけが違う。とてつもなく強大な力を秘めたスイッチだ。もしそのスイッチが別の世界に持ち出されてしまったらどうなるか…わかるな？」

「…」

その場の全員が沈黙した。

「つまり、もしヘル・スイッチが持ち出されてしまえば、デイケイド、お前が犯した過ちと同じようなことを、世界は繰り返すことになるんだ」

「俺の…過ち…まさか！」

「そう、ライダー大戦のようにな」

ライダー大戦。

かつて世界が辿った、破滅へのカウントダウン。

そしてその原因は、俺・デイケイドが”世界の破壊者”として覚醒したことだった。

”仮面ライダー”に戻る事が出来たのだった。

「それだけは絶対に避けなければならないと思い、私はヘル・スイッチを破壊するためこの世界に来ることにしたのだ。幸いまだ試作段階で、ヘル・スイッチはこの世界にひとつしか存在していない。

そうして来てみたらディケイド、貴様に先を越されていたというわけだ」

「なるほど……」

「もしヘル・スイッチがスイッチとして完成してしまつたら、この世界が、いや、他の世界すべてが危機に晒されてしまう。そこでだ」
「何だ、鳴滝」

「ディケイド、フォーゼ、力を貸してくれ。ヘル・スイッチを破壊するために。私も出来る限りのサポートをする。頼む。この通りだ」

鳴滝が……

土下座をした。

あのプライドの高い鳴滝が。いつも俺に口出ししてくる鳴滝が……

「……上等だ」

「またハモつた」

歌星がつぶやいた。

「おい海東、勝手に一人で行くなって！」

俺・小野寺ユウスケは、天の川学園に忍び込んでいた。

「何処にいるんだろ、土は」

まあ正確には、土の様子が気になって仕方がない、そう言って飛び出した海東を追いかけて来たただけだ。

「勝手に学校に入っちゃって本当にいいのか？」

「大丈夫。僕は一流のお宝ハンターさ」

…答えになってない。

「おや、何だろうあれは」

「え？」

海東が指差した先には、黒いスイッチがひとつ、転がっていた。

「どれどれ…これはどんなお宝なんだろう」

そう言っつて海東はスイッチを眺めはじめた。つたく、しょうがないお宝ハンターだな。

と、その時。

何かが俺の横をすつと通り抜ける、そんな気配がした。

「……………！ 誰だ！？」

気が付くと、海東が怪人に後ろから捕まれ、身動きが取れなくなっていた。怪人の身体にはさそり座が光っていた。

「仮面ライダーディエンド…海東大樹だな？」

「いきなり何のようだい？ 僕はそれどころじゃ」

そう言っつて、海東の表情がいきなり凍りついた。

「お前…このスイッチは、まさか……………！」

「その、まさかだ」

「やめろ！ そんなことしたら、僕は…！」

怪人は海東にの親指をスイッチのボタンに這わせた。

「星に、願いを」

かちっ。スイッチが押された。

「海東！？ うわっ！」

ものすごい衝撃波に、たまらず俺は吹っ飛ばされた。

「ってて……大丈夫か、海東」

俺は目を見張った。信じられなかった。

ディエンドの様な姿の悪魔が、そこにいた。

第三話「十・年・共・演」(3) (後書き)

次回、仮面ライダーディケイド

「海東、目を覚ませ！」

ゾディアーツ化してしまったディエンドと戦うディケイドとクウガ、そしてフォーゼ。しかしヘル・スイッチの驚異のパワーにより、窮地に追い込まれてしまう。そのピンチを救ったのは……！？

そして、ラストワン・ヘル・スイッチ最後のスイッチャーは誰なのか！？

次回、お楽しみに。

第四話「十・年・共・演」(4) (前書き)

これまでの仮面ライダーディケイドは

恐怖のヘル・スイッチを殲滅するため、鳴滝と手を組んだ仮面ライダーディケイド・門矢士と仮面ライダー部。
ヘル・スイッチの対策を立てているその頃、学園に忍び込んだ仮面ライダーディエンドこと海東大樹は、ヘル・スイッチによってゾディアーツへと変身してしまった…！

お手数ですが、本編を読まれる前に「活動報告」の記事『四話、ギリギリ』をこー読んで下さい。

第四話「十・年・共・演」(4)

「おい…海東？」

さっきまで海東大樹だった目の前の怪物が、

「ウオオオオオオオオオツッ！！」

天に向かって吠えるそれは、まさに悍ましい姿だった。

仮面ライダーディエンドに似ているが、普段は鮮やかなシアンが黒み掛かっており、粘膜が妖しく太陽を反射している。両手両足は獣のように変化し、禍禍しい尻尾が生え、そして体にはとかけ座が煌々と光を放っている。その体に秘めた力の強さを表しているかのように、周りには紫色の火花が散っていた。

「ツカサ…ツカサアアアアアアアア！！」

怪物と化した海東は土の名前を叫びながら、校舎のある方へと駆け始めた。

まずい、このままでは土だけじゃなく、この学園全体が危ない！

「待て、海東！」

俺はすぐに海東を追いかけた。いつの間にか、さそり座の怪人は見当たらなかった。

「変身ッ！」

俺 - 小野寺ユウスケは、仮面ライダークウガに変身し、

「超変身ツツ！」

青龍の戦士、ドラゴンフォームへと姿を変え、超スピードで海東を
追いつめる。

謎のスイッチを押した海東が、怪物になってしまった。

にわかには信じられないが、目の前でそれが起こったのだ。動揺して
いないといえば大嘘になる。

それに出来ることなら海東とは、仲間とは戦いたくない。もう誰も
大切な人を失いたくない。失っちゃいけないんだ。

でも、俺はクウガだ。ここにいる大勢の人達のために戦わなければ
いけない。みんなの笑顔を守りたい。

だから、

「俺は、士、そしてみんなを守るために戦う！ 海東、もとのお前
も絶対に取り戻す！」

「現在フォーゼの使用出来るアストロスイッチは全部で20個ある。
そのうち10番のエレキと20番のファイヤーはステイツチェンジ
の能力を持っている」

仮面ライダー部の部室、ラビットハッチにて、俺 - 門矢士と仮面ラ
イダー部の部員達（如月弦太郎、城島ユウキ、風城美羽、ジェイク、
大文字隼。歌星賢吾は…どうなんだろう）、そして鳴滝は、ヘル・
スイッチを殲滅するための作戦を練っていた。

俺と歌星、如月、鳴滝はどのスイッチを使用するかについて話し合
っていた。俺はフォーゼのアストロスイッチについてほしいしか
覚えてなかったので、歌星にそれぞれのスイッチの用途を教えるも

らっていた。

「これで全部のスイッチの説明は以上です」

「ああ。だいたいわかった」

「…ホントに大丈夫ですか」

「ごめんちゃんと思い出した」

歌星には冗談が通じない。

「ヘル・スイッチのゾディアーツの特徴は皮膚の粘膜と口から吐く
××…もとい、火炎弾。動きも速いから厄介だ。となると…」

「さつきみたいに遠くから攻撃すればいいんじゃない？」

「如月、確かに君の言う通りだが、相手の出現する場所によっては
ランチャーは使えないだろう」

「あ…：だったら近づいて攻撃するいい方法はないのか？」

「近距離戦ならスピードを上げるモジュールと粘膜の影響を受けず
に相手にダメージを与えるモジュールの両方が必要だ」

「ロケットは必須だな…あとはなるべく相手に触れるだけで攻撃で
きる武器があれば」

「オッサン、それならエレキ使おうぜ！ ビリーザロッドならちょ
っと触っただけでビリビリさせられる！」

「俺も君のアイデアに賛成だ」

「だな」

「うむ」

俺達がスイッチの話をしている一方で、ユウキやジエイク達は先程
の戦闘の映像を何度も見返して、相手の弱点を分析してくれていた。

『ディケイド…キサマヲ、タオス！』

「ここで止めてください」

ジェイクの指示で、ビデオを操作している城島が一時停止のボタンを押した。

「何かわかったの？」

風城が聞くと、ジェイクは首を傾げながら、

「このゾディアーツ、鳴滝さんは意識を乗っ取られてるはずなのに、
”ディケイド” 門矢先生を呼んでんですよ」

「つまり、完全に意識が失われているわけじゃないのね？」

「おそらくは、ですけどね。まあこのスイッチがまだ試作段階なら、
初期不良もありえるでしょ」

そういえば、そうだったな。さすが情報屋のジェイク、観察眼が鋭い。

「どっちにしろゾディアーツはゾディアーツだ。俺がデザイナーで食
い止めてみせる！」

「大文字先輩、すっかり仮面ライダー部の一員ですね！」

「フフツ、まあね（キラーン）」

城島に褒められて満更でもない顔の大文字。なるほど、普段は体格
の良い大文字がパワーダイザーを操縦していたのか。それなら歌星
が苦戦したのも納得がいくな…と、その時。

「ゾディアーツだ！ ヘル・スイッチのとかげ座！」

なんだと！？ もう次のスイッチャーが見つかったのか！？

「モニターオン！」

城島がモニターを切り替え、偵察のバガミールからの映像が中継され映し出される。そこでは

「ユウスケ……………海東!？」

青いクウガに変身したユウスケと、ディエンドそっくりの怪物に成り果てた海東が死闘を繰り広げていた。

クウガ - 俺、小野寺ユウスケは苦戦、というか一方的にやられていた。

どっつ。

「うげっ……………!」

どかつ。

「ぐっ……………!」

ごすっ。

「がはあっ……………!」

強い。

強すぎた。

海東が俺を目掛けて左の拳を繰り出す。

ばいっ。

「ぐふうっ……………!!」

もう何度目かわからない。

もはや動きに反応出来なくなっていた。

身体が、いうことを聞かない。

あのと、俺は海東に追いつき、渾身のストレートを右頬に叩き込んだ。

「グアッ!!」

駿足の威力も手伝って、海東は2メートル強吹っ飛ばされ転げ落ちた。まではよかった。

海東の逆鱗に触れてしまったのだ。

「ウガアアアアアア!!」

海東は俺に向かって雄叫びを上げながら、猛スピードで迫ってきた。

「うわっ、あぶな」

全部言い終わるまでに、俺の体は宙を舞っていた。装甲がぎしりと軋んだ。

どしゃっ。

地面にたたき付けられた俺の上に馬乗りになり、海東は猛烈な拳の応酬を俺に浴びせ続けた。

装甲はあちこちが凹み、クラッシャーからは血が噴き出していた。海東は立ち上がると今度は既にぼろぼろの装甲をぐりぐりと踏み付けた。鮮血がまた、口の中に広がった。海東が吠える。

「グオオオオオ！」

俺は…。

「グオオオオオオオオオ！」

俺は。

「グオオオオオオオオオオオオオオ！」

俺は！

「俺はまだ、死ねないんだ！！！」

死ぬわけには、いかないんだ！！

俺は力を振り絞り、両足を海東の足に引っ掛けそのまま締め上げた。

「グガ…グガアアアアア！」

突然のことに驚いた海東が拳を闇雲に繰り出した。が、

「もう俺にそのパンチは効かないぞ！」

タイタンフォームに超変身し鋼の装甲を手に入れた俺にはもう、そ

んなものは通用しない！

「はあっ！」

俺は隙だらけの海東の腹に拳を叩き込んだ。海東は10メートルほど吹っ飛ばされ木の幹激突し、崩れ落ちた。

「さあ、ここから反撃だ！」

「ユウスケ！」

「士…遅いよ！ 遅すぎるよ！」

クウガ・ユウスケがこつちを振り向き、おどけた風に言った。…が、

「よく頑張ってくれたな」

全てを見ていた俺は、静かにユウスケの肩を叩いた。

「士……」

「ここからは俺達も加勢する。味方も連れて来た」

「味方？」

「俺の部活の部員だ」

「…えっ？」

「俺は如月弦太郎。この学園の全員と友達になる男だ！」

「ええっ？」

「またやった……」

歌星がやれやれといった表情で額に手を当てた。

「そして、仮面ライダーフォーゼだ」

「仮面ライダー…フォーゼ？」

「彼はこの世界の仮面ライダーだ。この学園にいたんだ」

「鳴滝さんまで…！ もう、何がなんだかさっぱりわかんない！」

「まったく、そういうのは後で説明するから。海東をもとに戻すのが先だ」

「そうそうあの怪物海東が変身してt」

「わかってる！」

ユウスケが（…）こんな表情でしゅんとしたが今はそれどころじゃない。

「いくぞ、弦太朗！」

「おう…って先生今、俺のこと名前で…！」

「早く！」

「うっし！」

3（スリー！）

2（ツー！）

1（ワン！）

「変身！」

『KAMEN RIDER！ DECADE！』

俺と弦太朗はそれぞれディケイド、フォーゼへと変身した。

「いくぞ！」

「ああ！」

「宇宙、キタ

、(。) /

!!」

「弦太郎、前！」

「ガアアアアアアアッ！」

起き上がった海東が俺達に向かって迫る。

「ロケットは使うまでもないな…弦太郎、エレキだ！」

「わかってるって！」

フォーゼドライバーのロケットスイッチをエレキスイッチに差し替え、フォーゼはスイッチを入れた。

『エ・レ・キ オン！』

フォーゼの身体が電流に包まれ、黄色い戦士へと姿を変えた。

「っしやあ、気張っていくぜ！」

エレキステイツ専用武器「ビリーザロッド」のソケットにプラグを差し込み、

「はっ！ はっ！」

フェンシングの要領で海東の体を突いた。

ビリビリッ！

「ッグガガガガガガガg」

ビリビリビリッ！

「アガガガガガガッ！！！」

粘膜が張っているためか、水面を伝わるかのように身体全体に電流が走る。堪らず海東は痙攣した。狙い通りだ。

「よし、弦太朗！ そのまま痺れさせておけ！」

俺はファイナルアタックライドのカードを取り出した。

「ユウスケ、いくぞ！」

「ああ！」

ユウスケもタイタンソードを手にし、とどめを刺そうとした。が、しかし。

「うああっ！」

「どうした、弦太朗！」

「コイツ銃持ってるぞ！ あっぶねえ！」

しまった、そうだった…！

海東はディエンドライバーを携帯していたのか…当然っちゃ当然だが、なんて厄介な…！

『ATTACK RIDE！ BLAST！』

くぐもった電子音声とともに、砲弾の雨が俺達を襲った。

「うわっ！」

「ぐはっ！」

「だああっ！」

弾はことごとく命中し、俺達はその場に倒れ伏せた。

「あいつ、射撃の腕はそのまんまかよ……！」

「グギヤギヤ…ツカサア………」

海東が俺の名前を呼ぶ。

何か手立ては無いのか……？

思わぬデイエンドの反撃に、デイケイド達は再び不利な状況に立たされていた。

私・鳴滝は必死に知恵を巡らせていた。

「どうにかデイエンドを止める方法は無いのか…？」

「ある」

「ひえっ！？」

思わず声を上げたその先には、目の下に黒いメイクを施し、手には今流行りの…何だっけ、タブレット端末を携えた少女が立っていた。

「今…なんて言ったのかね？」

「弦太朗さんに、これを」

私の聞いたことをさらりと無視して、彼女は後ろに置いていた発砲スチロールの箱を私に差し出した。

「よし、今だ！」

「おう！」

「いくぜ！」

『FINAL ATTACK RIDE! DE DE DE D
ECADE!』

『エ・レ・キ リミットブレイク!』

俺とフォーゼの必殺待機音が鳴り響く。

「はあああああああつ……………」

ユウスケがタイタンソードに力を込める。

「ライダー100億ボルトブレイク！」

「タイタンカラミティ！」

ユウスケと弦太朗が同時に海東に切り付け、そして、

「デイメンションキック！」

俺がとどめの一撃を蹴り込んだ。

「グガアアアアツカサアアアアアアアアアアア！」

海東は俺の名前を叫びながら爆発、鳴滝と同じようにもとの姿へと戻った。

「海東！」

「う…うーん…あれ、士？」

寝ぼけているような表情で、海東はすぐに目を覚ました。

「如月！ スイッチが！」

「え？ ……うああ！」

歌星のその声でフォーゼ・弦太郎が驚きの声を上げた。俺も慌ててそつちを向く。

ヘル・スイッチは弧を描くように宙を舞い、そして

すぽっ、かちっ。

「？」

俺もよく知る先輩、大杉の手の中に収まり、再び起動した。

『ラストワン』

第四話「十・年・共・演」(4) (後書き)

次回、仮面ライダーディケイド

「如月い！ 全部全部お前のせいだあああああああ！」

ラストワンの力で暴走する大杉。それを止めようとする仮面ライダー達。

「仮面ライダーディケイド！」

「仮面ライダーフォーゼ！」

「タイマンはらせてもらっせー！！！！」

士と弦太朗、最後の共闘を見逃すな！

第五話「十・年・共・演」(終)(前書き)

これまでの仮面ライダーディケイドは

仮面ライダーディケイド・門矢士はフォーゼ・如月弦太郎とクウガ
- 小野寺ユウスケ、そして仮面ライダー部の協力のおかげで、ヘル・
スイッチによってゾディアーツ化してしまった海東をどうにか元
に戻すことが出来た。

しかし、ヘル・スイッチは最後のスイッチャー・大杉忠太の元へ飛
んでいき、起動してしまう！

第五話「十・年・共・演」(終)

『ラストワン』

「しまった！」

フォーゼ - 如月弦太朗が声を上げたが、もう遅かった。

「え？　ちょ、ちょっと待って何コレうわあああ！！」

天ノ川学園高校地学科教師の大杉忠太の体が、みるみるうちにその姿を変えた。

今まで戦ってきたものとは比べものにならない、巨大なとかげだった。体からは粘液が滴り落ち、異臭が周りに立ち込めてきた。

「うっ……！！」

やばい、気分悪くなってきた。いくらディケイド - 俺、門矢士でも、異臭には勝てない……。

「…あれっ？　あれれっ？　何だ？　何が起こってるの！？　何コレ僕！？　何でこんな恰好に！？」

リザード・ゾディアーツ完全体と化した大杉が、自分の姿を見てあわてふためいている。

…あわてふためいている！？

「先生、意識を乗っ取られてないのか!？」

弦太郎が俺の代わりにその疑問を口にした。

「その声…如月か!」

大杉は弦太郎のことをはっきりと認識している。一体、どうい
うことだ……?

「まさか…」

「鳴滝、何かわかったのか?」

「ヘル・スイッチが、覚醒したのかもしれない」

「覚醒? どういうことだ」

「もしヘル・スイッチがスイッチャーと呼応しあい、そのスイッチ
ャーと完全にシンクロすることによって真の力が発揮されるのだと
すれば…」

「お前と海東はスイッチと完全にシンクロできなかった、ってこと
か?」

「そうだ。我々は不完全なままゾディアーツ化したために、その力
が暴走し、意識を乗っ取られてしまった…!」

「その話が本当なら、今の大杉は!？」

「おそらくスイッチと完全にひとつになっている…」

ヘル・スイッチ…さっきまで苦戦していたものよりもさらに凶大な
力を秘めているというのか!?

「つまり、今の僕はとんでもない怪物、ってこと?」

話を聞いていたらしい大杉が割り込んできた。

「そうだ。先生、元に戻してやるからおとなしく」
「嫌だ！」

大杉は弦太朗の話を振り切った。

「…何？」

「僕は今までずっとお前のことが嫌いだった…お前がこの学園に転校してきたからろくなことなんて一つもありやしない！ むしろ悪いことばかり多くなった！」

「おい、それって言い掛かりだろ！」

「いいや違う！」

大杉が弦太朗を睨んだ。その目が、紫色に光り始める。

「学園のクイーンとキングも変になった！ お前と友達だって急に言い出して、怪しい部活動に精を出してるらしいじゃないか！」

「先生、それは違います！」

「僕達は弦太朗に救われたんです！」

クイーン・風城美羽とキング・大文字隼が言った。

「それに仮面ライダー部は怪しい部活動なんかじゃない！ 部長はこの私よ！ 何も知らなくせに侮辱することはいくら先生だろうと許さないわ！」

「黙れ！ 黙れ黙れ黙れ！」

大杉ががくがくと震え出す。

「まずい…ゾディアーツのパワーがどんどん上がって……このままだと暴走してしまう！」

「なんだって!?!」

早く止めないと

「生徒たちからも嫌われるし、園田先生にも最近ますます白い目で見られるし……!」

「いや、それは俺達と関係ないだろ!」

「やめる弦太郎! 今は何を言っても無駄だ!」

「だって!」

「ええい、こうなったのも全部全部、お前達のせいだああああああああああああああああ!」

ただ吠えた、それだけで地面に亀裂が走り、そこから炎が噴き出した。

大杉はついに暴走を始めてしまったのだ。

「いかん、このままでは危険だ! ライダー部の諸君、こっちへ!」

「俺はいい! 如月のフォローをするためにここに残る!」「あたしも残る!」

「私も!」

「俺も残るっす!」

「俺も!」

鳴滝が仮面ライダー部の部員を避難させようとしたが、全員が言うことを聞かない……!

「お前達の、せいだあああああああああ!」

大杉が巨大な火炎弾を口から発射した!

まずい、このままではみんなやられてしまう

『ロケット ドリル リミットブレイク!』

フォーゼ…弦太朗!?

「ライダーロケットドリルキイイイイイイイイイイイイイイイイイ
ク!」

あいつ…キックで火炎弾を相殺する気だ!

「よせ! 無茶だ」

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!

「如月いいいいいいいいいいいいいいいい!!」
「弦太朗おおおおおおおおおおおおお!!」

凄まじい爆発が起こった。

動かなくなつたフォーゼは地面に落下、衝突した。
変身が解けた弦太朗は、傷だらけだった。

「弦太朗! 弦太朗!! おい!! 弦太朗!!」

脈は…ある。

俺は何度も弦太朗の名前を呼んだが、気を失っていて返事は返ってこなかった。

「如月! しつかりしろ! 如月!!」

「歌星」

「先生……………?」

「皆で、部室に弦太朗を運べ。こいつとは俺がカタをつける」

「先生、ちよつと待」

「いいから運べ！」

「……！ わかりました……」

「待った、士」

「なんだ海東！」

「君も一緒に行きたまえ」

「なぜだ！」

「士は仮面ライダー部の顧問。今は部員の心配を第一に考えたまえ」

「俺達が、なんとかするからさ」

「ユウスケまで……」

「ここは僕らに任せて、ねっ？」

……………。

「……………すぐ戻る。それまで頼む」

俺は大杉を海東とユウスケに任せて、部員達と共に弦太朗を部室まで運んだ。

「いくよ、ユウスケ」

「合点だ！」

「変身！」

『KAMEN RIDER! DIEND!』

『キユイイイイイイイイイイン!』

僕、海東大樹は仮面ライダーディエンドに、横にいる小野寺ユウス

ケは仮面ライダークウガに変身した。

「近づくのは危険かもしれない。遠距離攻撃でいくよっ！」
「了解！」

『KAMEN RIDE! ZOLDA!』

『KAMEN RIDE! BIRTH!』

「からの」

『ATTACK RIDE! CROSS ATTACK!』

僕は銃火器ライダーのゾルダとバース（バース・デイ）を召喚し、それぞれの必殺技を発動させた。

『ファイナルベント!』

『セル・バースト!』

ゾルダの契約モンスター・マグナギガから大量のミサイルやレーザーが、バース・デイのブレストキャノンから広範囲にレーザーが発射され、怪物に命中した！
でも、

「そんなもの、僕には通用しない！」

怪物はびくともしなかった。

「あれだけの攻撃を受けてもひるまないのか……!?!」

「無駄だあ！」

「うわっ！」

怪物の腕のひと薙ぎで、ゾルダとバース・デイは爆発後消滅した。

「次は俺が！」

ライジングペガサスフォームに変身したクウガ・ユウスケが、怪物目掛けて矢を発射した。矢は真つすぐ飛び、怪物の腹に命中

「ふん！！！」

する前に、怪物の火炎弾で相殺されてしまった。

「ああー、ダメかー！」

「君達の攻撃は全部僕には効かないってことだよ！ はあっ！」

ガッ！

「ぐあああああっ！！！」

怪物の拳を正面から食らって、僕とユウスケは吹っ飛ばされた。

「これは……思ったより倒すのが大変そうだね」

「……………う、うーん……」

「…弦太郎！」

「如月！」

俺・門矢士と仮面ライダー部の部員とで部屋に運んで寝かせてから間もなくして、弦太郎は意識を取り戻した。俺達は心配していた胸

をほつと撫で下ろした。

「ここは…ラビットハッチか！ ……痛っ！」

「如月、どこか痛むのか？」

「いいや、ちよつとかすつてるだけだ」

本人の言う通り、弦太郎は体中擦りむいてはいるものの、奇跡的に骨折などの重傷には至っていないかった。

弦太郎は絆創膏を貼りまくり、

「これでよし、っと」

「ったく、無茶するんだな。もしかしたらお前、これくらいじゃすまなかつたかもしれないんだぞ」

「もしあそこで俺が何もしなかつたら、先生や賢吾やみんなが危なかつたかもしれないねえ」

「それはそうだが…」

「先生」

弦太郎は真剣な目で俺を見た。

「俺はこいつらのためなら貶されても騙されてもいい。こいつらのためなら、この体だって張る」

「なんでそこまで必死なんだよ」

「友達^{ダチ}だからだ」

その言葉には、揺るぎない自信と決意があつた。

「ちよつと無茶で強引だけど、とつても友達想いなのが、弦ちゃんのいいところなんですよっ」

「これが、青春ってやつなんだろうなあ……」

鳴滝が密かにつばやいた。鳴滝の青春時代……どんなだったんだろう。ちよつと知りたい。

「先生、ちよつと見せたいものがあるんだ」

「……なんだ？」

弦太郎に連れられて、俺は

「うおおっ……！」

月の上に立っていた。

四方全部が、広大な宇宙空間。自分の目で見るのはもちろん初めてだ。ていうか、生きてるうちにここに来れるとは思ってなかった。

「先生、あれが地球だ。すげえだろ？」

これは……。

思わず息を飲むほど青く美しい地球が、目の前の暗闇に浮かんでいた。筆舌に屈しがたいとは、まさにこのことなんじゃないかと思う。

俺はかつて、こんなにも綺麗な世界を破壊する存在だったんだな……

「……すごいな、地球」

「だろ？」

宇宙服姿の弦太朗が、地球を見ながら言った。

「俺はこれから出会うすべての人と友達になりたい。この地球と友達になりたい。だから、まずは俺の高校の奴ら全員と友達になることが、俺の目標なんだ」

弦太朗は俺を見て、

「もちろん先生とも、友達ダチになるからな！」

楽しそうに笑った。

「ぐあっ！」

「うわあっ！」

また、吹っ飛ばされた。

僕 - 仮面ライダーディエンド、海東大樹とユウスケ - 仮面ライダークウガは、怪物の猛攻に耐えながら攻撃を続けた。が、全て弾き返されたり当たってもびくともしなかつたりで埒が開かなかつた。

でも、僕はお宝ハンター。あることに気がついた。

さつきから、怪物は腹に来る攻撃を念入りに防いでいる。ということとは、腹が怪物の弱点と見て間違いないはずだ。

…はずなんだけど、その攻撃は届く前に全て防がれてしまう。

「くそっ！ あいつどれだけタフネスなんだよ！」

「タフネスな上に相当なテクニシャンだよ、あれは」

「何をごちゃごちゃ喋ってるんだ！！」

ドゴッー！

「うおっ！」

「危ない！」

寸でのところで怪物の火炎弾をかわす。さっきまで立っていたところが明るくなった。

辺りは暗くなりかかっていた。士達が行ってからまだ1時間も経ってないはずだけど、時間の流れが早く感じる。

このままじゃキリがない、だけどうかつに近づくことはできない……どうすれば、どうすればいいんだ！

「待たせたな！」

聞き覚えのある声がした。

「士………！」

「遅くなったな、海東、ユウスケ」

後ろから、夕日が射している。

俺 - 門矢士と如月弦太郎、歌星賢吾、城島ユウキ、風城美羽、ジエイク、大文字隼、野座間友子、ついでに鳴滝。

俺達仮面ライダー部は全員で、また、決戦の舞台へと戻ってきたのだ。

「お前達、またのこのことやられに戻ってきたのかあ！」

怪物 - 大杉が明らかに俺達を見下した口調で言った。

「やられに戻ってきたんじゃねえ！ お前を倒すために戻ってきたんだ！」

「如月い、お前が今の僕に敵うとも思ってるのかああ？」

「わからねえ！」

「…何い？」

「それはやってみなきゃわからねえ。でも、今の俺なら、お前に勝てる気がするんだ！」

「なぜだ？」

「友達が増えたからだ」

「友達い……？ そんなことか！ そんなことで僕に勝てる気になれるなんて、お前は馬鹿だなあ！！」

「…んだと……？」

「たかが友達だぞ？ 友達なんてどこまで行っただだの他人だぞ？ お前は他人のために、汗を流すのか？ 他人のために、命を懸けるのか？ だとしたら本当に馬鹿さんだよお前はあ！！」

「馬鹿じゃねえ！」

「…何？」

「先生……？」

「友達のために汗を流したり、友達のために命懸けたり…それは決して馬鹿なことじゃねえ！ 友達はかけがえない宝物…だから大切にしたいんじゃないか！ だから必死になるんじゃないか！ それがわからないお前の方が、よっぽど馬鹿だ！ 大馬鹿だ！」

「先生………」

「弦太郎は、友達のためなら騙されてもいいと言った。友達のためなら体を張ると言った！ 自分のことしか考えてないお前には、一

生わからねえよ！」

「お前は…お前は一体何なんだ！」

「天ノ川学園高校臨時講師、仮面ライダー部顧問、そして…通りすがりの仮面ライダーだ！ 覚えておけ！」

「仮面ライダー…だと!?!」

「いくぞ弦太朗！」

「おう！」

3（スリー!）

2（ツー!）

1（ワン!）

「「変身!」!」

『KAMEN RIDER! DECADE!』

「先生！」

「ああ！」

「宇宙、キタ

!」!」

＼（）（／＼（）（）／

「仮面ライダーディケイド！」

「仮面ライダーフォーゼ！」

「「タイムンはらせてもらっぜ!!」」

俺とフォーゼ、最後のバトルが始まった。

「はあっ! はあっ!」

大杉が火炎弾を連続で放つ。俺と弦太郎はその中へ構わず突っ込み、

「おりゃあ!」

「そらっ!」

大杉の右足に高速でダブルキックを放った。足の風圧があまりにも高速だったためか、粘液が剥がれ落ちた。

「ぐおおおおっ!」

キックは命中し、大杉はその場に崩れ落ちた。

「如月、門矢先生! ゾディアーツはラストワン形態だが、大杉先生はヘル・スイッチからその肉体を分離されていない! そのまま倒すと大杉先生が危険だ!」

歌星が叫んだ。

「じゃあどうすればいい!」

「どこか弱点があるはずだ! そこを集中して狙えば…」

「弱点ってどこだよ!」

「士! 怪物の弱点は腹だ!」

「俺達が引き付けるから、その隙にドーンとぶちかませ!」

「腹か！」

海東とユウスケが、大杉の弱点を教えてくれたその時、ライドブックから新しいカードが俺の手元に飛んできた。

……よし！ これなら勝てる！

俺はデイケイドライバーを開き、出てきたばかりのカードを差し込みバツクルを回転させた。

『KAMEN RIDE！ FOURZE！』

凄まじい蒸気と熱風に包まれ、俺は弦太郎と同じ、仮面ライダーフォーゼの姿に変身した！

「ええっ！ 先生そんなことできるのかよ！」

「まあな。ロケットでいくぞ！」

「了解！」

『ATTACK RIDE！ ROCKET MODULE！』

『ロケット オン！』

俺とフォーゼ、両方の右手にロケットモジュールが装備された！

「うおおおおおおお！」

俺とフォーゼはそれぞれ、大杉の周りを四方八方飛び回った。

「弦太郎、フルパワーで飛び回れ！」

「わかつてる！」

ロケットの出力を最大にして、俺達はさらに加速した。

「くそっ、お前ら、ちょこまかと……食らえ！ 食らえっ！」

大杉が大きな腕を振り回すが、全て空回りした。ぶんぶんとが空を切る音が虚しく響く。

俺達の動きが早すぎて、視界に捕らえることが出来ていないのだ。

「はあっ！ はああっ！」

大杉がやけになって火炎弾を放つ。が、やはり一発も当たらない。

「くそっ！ くそっ！」

「隙だらけだよ、怪物くん！」

「さつきはよくも！」

大杉が俺達の動きに混乱している隙に、海東とユウスケが怪物目掛けて同時に発砲（発射）した。

「ぐあああああ！ 痛い！ 痛iiiiiiiiiiii！」

攻撃はさつき粘液の剥がれた右足に命中し、大杉は再び仰向けに倒れた。

今だ！

「弦太郎！ リミットブレイクだ！」

「おう！」

『FINAL ATTACK RIDE！ FOF OF F
OURZE！』

「俺はジエイクのままですよ、まああたりまえかw」

「お会いできて嬉しかったです、門矢先生（キラーン）」

「……ありがとうございます／＼／＼」

俺は忘れないようにお礼を言った。

「そして、賢吾」

「……はい」

「ヘル・スイツチはきつとこれからも使われる。これで終わり、じゃない」

「はい」

「今回は俺達が助けてやれたが…次からは、お前が弦太郎を助けるんだぞ」

「先生に言われなくても、わかってますって」

賢吾が初めて笑った。

「…そうか。頼んだぞ」

「……先生！」

「何だ？ 弦太郎」

「……俺、先生のこと忘れねえ！ 絶対に忘れねえから！ だから……先生も元気でな！ ……あれ、俺、泣かないって決めてたのに、おかしいな……涙が……止まらねえ……っ！」

「弦太郎」

「……先生？」

「ありがとな」

「……うああああああああああん！！ ころなったら

泣いてやる！ 涙は心の栄養だあああああああ！！ うああああああああああん！！」

眩しい夕日の中、弦太朗の泣く声が、いつまでも響き渡っていた。

「土っ」

「なんだ海東」

「僕達つて、友達…だよな？」

「そうだな」

「俺も、土の友達だよなっ？」

「もちろんだ」

「僕達、ずっとずっと、いい友達でいようね」

「友達でいような！」

「…ああ」

夕日の中、俺達は写真館へ向かって、真っすぐ真っすぐ歩いていった。

「ぐっ…友達とかうらやましい…うらやましいぞディケイドオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

鳴滝は夕日に向かって、一人叫んでいた。

第五話「十・年・共・演」（終）（後書き）

どうも、そらとびです。

デイケイド×フォーゼのクロスオーバー、どうにか完結しました！
いろいろありましたが、最後まで書ききることが出来てほっとして
います（＾－＾）；

士と弦太郎、最初はなかなかどう動かしていいのかわからなかった
ですが、最後のほうになるともう勝手に動き出してくれましたw
ちなみにこの小説は、時系列的にはフォーゼのテレビシリーズ本編
の第十話終了後ぐらいの出来心です。「アストロスイッチは全部で
20個」って賢吾が言っちゃってますし（笑）

ここからは小ネタなどです。

今回小説を書くにあたって「記念ライダー同士の共演なんだから、
いろいろなライダーを出したら面白いかな」と考えたのですが、た
だでさえ人の書き分けが上手でない僕がライダーをたくさん出して
も、バトルシーンとかがえらいことになっちゃうだろうなと（笑）
そんなわけで、メインライダー以外に登場させるのはゾルダとバー
スだけに泣く泣くとどめました。そのかわり、歴代ライダーに関連
するネタや言葉を小説本編に散りばめてみるという誰得なお遊びを
やってみたので、興味のあるかたは探してみてください。

もう一つ。小説本編の最後の戦闘シーン、デイケイドがフォーゼに
カメンライドしたところらへんから、仮面ライダーフォーゼのオー
ブニングテーマである土屋アンナさんの「Switch On!」
のテレビサイズを再生して読んで頂くと臨場感が3割増します！

たぶん！

ぜひやってみてください！

最後にお詫びです。

次回予告についてです。

最終話予告でディケイドが「フォーゼ、ちょっとくすぐったいぞ」と、フォーゼのファイナルフォームライドを匂わせるような終わり方になっていたのですが、実際の小説本編は……もうおわかりですね。こちらの都合で、ディケイド×フォーゼのダブルライダーキックに変更させていただいております。

なお、該当の予告部分は現在、修正させてもらっています。

フォーゼのFFRを楽しみにされていた方には、本当に申し訳ございませんでした。

また、他にも予告と小説本編のセリフが一部異なっています。僕の詰めが甘かったです。ごめんなさい。

まあそんなこんなでフォーゼ編はなんとか完結しました。感想や

評価、質問などいただけたら嬉しいです！

それでは次回作でお会いしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2734y/>

仮面ライダーディケイド -a variety world- 第二章 「十・年・共・演」

2011年11月20日18時58分発行